

平成23年12月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859）

御岳山の葬儀

御岳山の葬儀は神葬祭で行われ、現在でも江戸時代から続く五人組（組合）がその段取りをしています。組合や親戚のほか、冠婚葬祭で協力する二人付き合い、一人付き合いが家により決まっています。不幸の知らせが入ると組合がその家に集まり、日程や葬儀の役割を付き合いの中から決めていきます。二人付き合いの一人は、葬儀の後に饗^{もてな}されるお膳のまかないなどを行います。また、付き合いのない家は、埋葬の準備や野辺の送りに携わり、山上全戸の協力で葬送儀礼が行われます。そして、日程と役割が決まると呼び遣いといって、組合二名で各戸に葬儀のお願いに伺います。

御岳山は今でも自宅で葬儀を行う事が多く、葬儀で使用する祭具などの準備や広間の斎場設置は、通夜祭の前に付き合いの者で行います。そして通夜祭と告別式に当たる葬場祭は、斎主に祭員三名で奉仕し、伶人三名が雅楽を奏でる中丁重に執り行われ、組合の一人が葬儀の司会進行を行います。伊勢神宮外宮祠官の中西直方が「日の本に 生れ出でにし益人(ますびと)は 神より出でて 神に入るなり」と詠むように、神道では人間は神様から授かり、亡くなると子孫を見守る家の守護神になると考えています。神は神聖であり穢れを嫌うため、神社の入り口の手水舎で身体を清めてから参拝し、祈祷の際にはさらに修祓(しゅばつ)といってお祓いしてから祭儀が始まります。一方日本人は死を穢れととらえて忌む習慣があります。家族に不幸があると、四十九日を終え忌明けするまでは神社への参りを避けます。ですから神葬祭は亡くなられた方の御霊(みたま)を偲び、偉業をたたえ、幽世(かくりよ)への旅立ちと、家の守護神の一員となるための儀式といえます。その依り代が仏式の位牌に当たる霊璽(れいじ)で、一般に通夜祭に先立ち柩より御霊が遷されます。遷霊の際は照明が消され、「オー」という警蹕(けいひつ)をかけます。神社の例祭（神社で最も重要な祭典）で本殿御扉開閉の際や、地鎮祭で神様をお迎えし、お帰りいただく時と同じです。また、霊璽に記されるのは戒名で無く、生前の名前の下に〇〇大人命(うしのみこと)や〇〇刀自命(とじのみこと)などを加えた神名になります。位牌と違い霊璽を火葬場やお墓に持参しないのも、霊璽が神聖な神の仲間入りするための依り代であるためです。神葬祭と仏式葬儀との違いは、表面的には参列者がお焼香でなく玉串拝礼をする点ですが、葬儀に対する考え方の違いが、儀式の構成全体に現れています。また、祝詞奏上や玉串拝礼の拍手は音を立てずに行いますが、これを忍手(しのびて)といってお、遺族の悲しむ中、甲高い柏手の音は相応しくないと、

おおむね五十日祭の忌明けまで行われる作法です。

神主も江戸時代は寺請け制度のため仏式葬儀が行われていました。そのため現在行われている神葬祭の歴史はまだ百数十年といえます。御嶽でも現在のふれあいセンターの場所には、江戸時代正覚寺というお寺があり、山の住民も僧侶による葬儀が行われていました。しかし葬場祭の後に行われる野辺の送りには、江戸時代からの風習が残されているようです。松明（杉皮を束ねたもの）を先頭に、竹に吊した銘旗と白黒の旗、剣または薙刀（男性は剣、女性は薙刀の形を木で作し、竹の棒に刺して刃を和紙で覆い、その和紙に家紋を入れます）、墓標、花籠、斎主に弓矢を持った祭員に続き、柩、遺影、お膳を持って親族がならび墓地へと向かいます。御岳山には二か所にお墓がありますが、その入り口には母屋といわれる建物があります。ここは葬儀の時にだけ使われ、母屋の墓地側に台を置き、そこに柩、遺影を載せ、修祓、祝詞奏上に続き、祭員二名が母屋から墓所上空に向けて矢を二本放ちます。幽世への旅に災いが無いように行うのでしょうか、確かな理由はわかりません。その後埋葬され、墓標の周りを竹と縄で囲み紙垂（しで）を垂らし、墓前にお膳と花が供えられ、親族や参列者がお参りをします。

家に戻るとその日のうちに家祓（やばらい）といって、榊に紙垂を麻で結んだ大麻（おおぬさ）という祓具（はらえぐ）で、家の隅々を祓い清めます。そして「れいじんさま」とよばれる祖霊舎に霊璽を安置します。霊璽をお遷しする際も照明が落とされ警蹕がかかります。その後十日祭が行われ一連の儀式が終了します。霊璽は五十日祭の後、祖霊舎に遷される事が一般的ですが、御嶽では埋葬を終えると、すぐに守護神として祖先の仲間入りをします。これは山上の者全てが御嶽神社に関わっており、忌明して少しでも早く日常生活に戻り、神社に奉仕するためだと思われます。

御岳山でも最近では専門の斎場で葬儀が行われる事がしばしばあります。それにともない、昔ながらの葬送儀礼も簡略化される傾向にあります。しかし、地域全体で亡くなられた方を丁重にお送りしていた事が御嶽の葬儀の根本にあり、その気持ちは未だに失われてはいません。

（文責 須崎 直洋）



御岳山下戸母屋